

果樹吸収蛾 *Calpe* (ウスエグリバ属) の 分類学的再検討

杉 繁 郎

東京都大田区入新井 4ノ112

On the Japanese species of the genus *Calpe* Treit.
(Lepidoptera, Noctuidae)

By Shigero Sugi

各地の果樹園において種々の熟果を吸収加害する蛾類については最近強い関心が寄せられ、その生態、生活史、被害及び防除などに関するかなり多くの報告がある（例えば野村・服部・河田, 1958, 1959）。これらの蛾類はほとんどがヤガ科のものであるが、そのうち特に“第1次加害種”として質量ともに大きな被害を与えるのは属 *Calpe* 又は *Oraesia* にぞくするいわゆるエグリバの類である。我国では古くからウスエグリバ, オオエグリバ, ヒメエグリバ, アカエグリバの4種がよく知られており、これらの種はしばしば図説され（最近では緒方, 1958; 杉, 1959）、また多くこれらの名の下に被害が記録されて来た。しかし私が最近これらの群について多数の標本を調べ、また文献を再検討した結果では、今までのこれらの種の取扱いにはいくつかのまちがいが見出されると共に、従来日本ではほとんど注意されていなかった2, 3の種類が誤って同定されたり、あるいは上記の種を混同されたりしている場合が多いのではないかと考えられるに至った。これらの中には果樹の害虫としても応用昆虫学上重要な防除対象となる種を含んでおり、将来の分布、生態の調査や防除対策などのためにも早急に正しい分類を確立しておくことが必要と思われるので、ここにそれらの正しい種名を示し、同定上の識別点を述べておきたい。

本文に入るに当たり、有益な助言と材料の援助を頂いた農業技術研究所の服部伊楚子氏、及び弘前大学文理学部生物学教室の斎藤和夫氏ならびに標本の提供を頂いた諸氏にあつくお礼申上げる。また北海道大学農学部昆虫学教室の内田登一教授及び渡辺千尚博士からは同教室所蔵標本の調査に多大の便宜をはかつて頂いたことを記して感謝の意を表したい。なお Museo Civico di Storia Naturale (Genova) の E. Berio 博士と British Museum (Natural History) の D. S. Fletcher 氏からも一部教示と援助を受けたことを併せて謝意を表する。

Calpe 及び *Oraesia* 属の特徴

日本産のいわゆるエグリバの類は次の2属に分類される。

- 1 一ひの触角は基方約3/5では単列の櫛歯状を呈し、その枝はすこぶる長く、触角の先端部約2/5では微毛状、下唇鬚は厚く毛で被われ、特に第2節の側面及び下面に生ずる毛は円錐状の毛塊となつて前下方に向い突出する……………ヒメエグリバ属 *Oraesia*

2—♂の触角は種によつて異なるが、基方で単列の櫛歯状となることはない、下唇鬚は厚く毛で被われるが、第2節の下面に生ずる毛塊の先端部は円錐状に突出せず、ブラシ状に落ち落される……………ウスエグリバ属 *Calpe*
 これら2属のうち *Oraesia* 属にはヒメエグリバ *O. emarginata* Fabricius 及びアカエグリバ *O. excavata* Butler の2種が日本に産し、特に中部以西の温暖な地方では *Calpe* 属の種以上に重要な害虫となつてゐるが、その種名についても識別上にもかくべつ問題がないので本報文では記述を省略し、以下 *Calpe* 属の種について論ずることとする。

日本産 *Calpe* 属の種の検索表

- 1—♂♀ともに触角は両櫛歯状、その枝は♂ではいちじるしく長く、両側の枝はほぼ等長、触角の中央部では節の長さのおよそ4倍に達する (Fig. 9) ……………ウスエグリバ *C. thalictri* Borkhausen
- 2—♀の触角は糸状、♂の触角は種によつて異なるが、両櫛歯状の場合にはその枝は短い……………3
- 3—♂の触角は両櫛歯状で、その外方の枝は内方の枝よりも長い……………5
- 4—♂の触角は両櫛歯状でない……………7
- 5—♂の触角の外方の枝は触角の中央部で節の長さのおよそ3倍 (Fig. 10)、前翅外縁及び縁毛端部はなめらかで波状を呈しない、前翅地色は灰褐色ないし紫褐色……………オオエグリバ *C. gruesa* Draudt
- 6—♂の触角の外方の枝は触角の中央部で節の長さのおよそ2倍 (Fig. 11)、前翅外縁は強くまるみをおびて外方に張出し、外縁及び縁毛端部は波状を呈する、前翅地色は濃い黄褐色……………キンイロエグリバ *C. lata* Butler
- 7—♂の触角は短いいば状の歯を複列に生ずる (Fig. 12)、前翅地色は紫灰色ないし灰褐色、各横線に沿つて帯状に緑褐色ないしオリーブ色をおびる、翅頂に発する斜条は太く濃いオレンジ色、その外方は淡色にぼかされる……………キタエグリバ *C. hokkaida* Wileman
- 8—♂の触角は基方数節の背面に強い棘状の鱗毛を密布し、触角の下縁は葉片状 (Fig. 13)、前翅地色は一様にくすんだ灰褐色で、各横縁に沿う帯状の濃色部をもたない、翅頂から発する斜条はやや細く赤褐色を呈し、その外方は淡色にぼかされない……………ミナミエグリバ (新称) *C. minuticornis* Guenée

日本産の種の記載

Calpe thalictri Borkhausen (=capucina auct.)

ウスエグリバ (Figs. 1, 2)

Bombyx thalictri Borkhausen, 1790: Eur. Schmett., 3: 425.

Calpe sodalis Butler, 1878: Ann. Mag. Nat. Hist. (5) 1: 203.

Calpe capucina and ab. *intensiva* Warren, 1913: 383, pl. 69g, 70a.

Calpe capucina 松村, 1910: 18, pl. 18, f. 20 (ウスエグリバ); 松村, 1931: 771, f. 715 (ウスエグリバ); 松村, 1932: 565, pl. 23, f. 5 (ウスエグリバ); 河田, 1932: 1149, f. 2267 (ウスエグリバ); 河田, 1950: 750, f. 2114 (ウスエグリバ); 井上・杉, 1958: 578 (ウスエグリバ); 緒方, 1958: 171, f. 2380 (ウスエグリバ); 杉, 1959: 148, pl. 101, f. 6 (ウスエグリバ).

Calpe thalictri Berio, 1956: 113.

成虫: 下唇鬚側面, 頭部及び胸背はうすい灰褐色, 腹背はうすい灰黄色, 前翅地色はやや変化があるがうすい灰褐色ないし紫灰色. 翅頂から発する斜条は黄褐色ないし赤褐色で, 通常第2-3脈の部分で浅く内方に彎入し, この傾向はこの属のなかでもつとも強い. 後縁のえぐれのほぼ中央におわる. 各横線はあまり明瞭ではないが, しばしば褐色, 黄褐色又は緑褐色で帯状にそめられる. 前翅の外半で翅脈はうすく灰黒色にそめられ, 中室の上角及び下角にはうすい黒点が出ることもあるが, みとめられない個体も多い. 翅頂から出る亜外縁線は暗色で, 波状に屈曲しているがあまりはつきりせず, しばしば翅脈上に暗色の小点をのこす. 縁毛は前翅の地色とほぼ同じで, 先端は黄褐色をおびる. 後縁角および基部の葉状部周辺の縁毛は黄褐色. 後翅はうすい灰黄色ないし灰褐色, 横線はみとめられないことが多いが明瞭ではなく, 外縁部はひろく暗灰色をおびる. 縁毛はうすい黄白色. 開張: 41-49 mm.

♂交尾器 (Fig. 14): Valva の腹縁はよく骨化し, その先端部は内方に曲りハンマー状を呈する. Harpe は左右対称, よく発達し, 棒状で先端はするどい. Aedoeagus はきわめて細く長く, 先端部に1小歯をそなえ, 背面には微小な歯からなる帯状の鑷状部をもつ. Cornutus を欠く.

幼生期: 本種の幼生期はヨーロッパでは古くから知られ, 種名も食草 *Thalictrum* に由来する. 日本では野村・服部・河田 (1958) 及び河田 (1959) によつて幼虫が図示された. 食草は同じくカラマツソウの類 *Thalictrum* である.

分布: 日本, 朝鮮, 台湾, 中国, アムール, 樺太, ソビエト, ヨーロッパ中部及び南部.

この蛾は以上のように旧北区にひろい分布をもつ唯一の種で古くから記載されていた. しかし Berio (1956) によると今まで一般に使われていた種名 *capucina* Esper は誤用であつて, もつとも古い有効な名は *thalictri* Borkhausen (1790) である. すなわち従来この蛾は Esper (1789) が記載したものとして扱われていたが, これは実は *capucina* Linné (1758) の引用に過ぎず, しかも Linné が *capucina* と名付けた蛾はウスエグリバではなくてシャチホコガ科の1種であるという. 日本から記載された *Calpe sodalis* Butler (1878) は本種の全くの異名であり, また Warren (1913) が日本産の2♀♀によつて命名した *ab. intensiva* Warren については Berio も決定を保留しているが, これはまず *thalictri* の大型の個体と考えるべきであろう. 日本でも本種は常に正しく図示され, 特に混乱は生じていない.

国内では北海道, 本州, 四国, 九州に産するが, 屋久島及び奄美大島の記録は再調査を必要とする. 私の直接確認した産地は次のとおりである.

北海道: 釧路国標茶, 14 ♂♂ 1 ♀, VII-VIII (飯島一雄採集); 札幌, 多数 (北大所蔵標本).

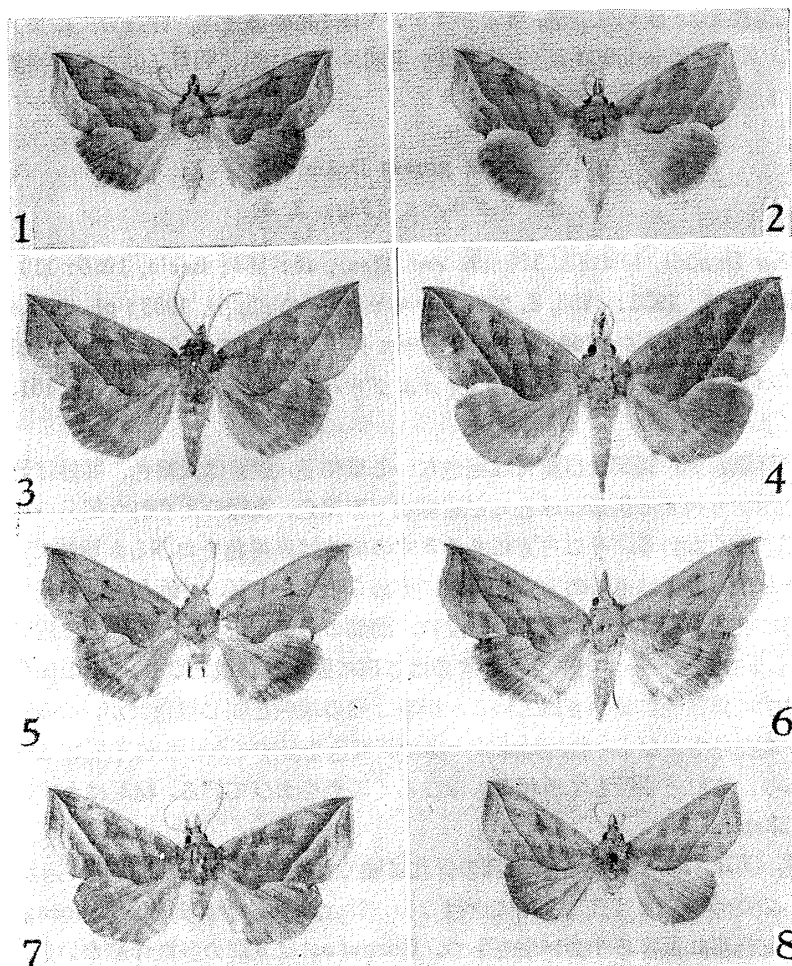


Fig. 1. *Calpe thalictri* Borkhausen ♂, ウスエグリバ.

Fig. 2. ditto ♀.

Fig. 3. *Calpe gruesa* Draudt ♂, オオエグリバ.

Fig. 4. ditto ♀.

Fig. 5. *Calpe lata* Butler (= *aureola* Graeser) ♂, キンイロ
エグリバ.

Fig. 6. ditto ♀.

Fig. 7. *Calpe hokkaida* Wileman ♂, キタエグリバ.

Fig. 8. *Calpe minuticornis* Guenée ♀, ミナミエグリバ.

本州：青森県浅虫，1 ♂，VII（北畠宏採集）；群馬県川原湯，1 ♂，VII（杉採集）；群馬県北軽井沢，1 ♂ 1 ♀，VIII（杉採集）；長野県軽井沢，2 ♂ ♂，VII（杉採集）；長野県伊那市，1 ♂，VI（小林靖彦採集）；東京都高尾山，2 ♀ ♀，VI（杉採集）；静岡県大滝温泉，10 ♂ ♂ 1 ♀，VII（杉採集）；新潟県弥彦山，4 ♂ ♂ 3 ♀ ♀，VI，VII，IX（佐藤力夫，桜井精採集）；新津市秋葉山，1 ♀，VI（佐藤力夫採集）；新潟県小木，城，3 ♂ ♂，VIII（佐藤力

夫, 村木弘昌採集); 新潟県逆巻, 4 ♂♂ 1 ♀, VII (馬場金太郎, 佐藤力夫採集); 岐阜県平湯, 1 ♀, X (馬場金太郎採集); 兵庫県氷上郡神楽, 1 ♂, VIII (山本義丸採集); 兵庫県氷ノ山, 1 ♂, VIII (山本義丸採集).

Calpe gruesa Draudt

オオエグリバエ (Figs. 3, 4)

Calpe gruësa Draudt, Mitteil. Münch. ent. Ges., 40: 168; Berio, 1956: 119.

Oraesia lata 河田, 1932: 1150, f. 2270 (オホエグリバ); 平山, 1933: pl. 40, f. 9 (オホエグリバ); 河田, 1950: 750, f. 2113 (オオエグリバ); 緒方, 1958: 171, f. 2383 (オオエグリバ); 井上・杉, 1958: 579 (オオエグリバ); 杉, 1959: 148, pl. 101, f. 3 (オオエグリバ).

成虫: 下唇鬚側面, 頭部及び胸背は褐色ないし紫褐色, 腹背は灰褐色. 前翅は比較的濃い紫褐色, 翅頂から発する斜条はほとんど直線状で赤褐色, 後縁のえぐれた部分の中央よりいくぶん基部に近くおわる. その内方にある3本の横線は赤褐色をおびるが明瞭でない. 前縁は黄褐色をおび, 翅脈は翅の外方で灰黒色にそめられる. 中室端付近も濃色を呈するが, 上角及び下角に明瞭な黒点を現わすことはない. 前翅の外縁に近く, 第3脈上に円形の淡色斑(灰色ないしうすいオリーブ色)を現わすのは本種に固有な特徴となり, その部分から外縁にかけてうすい紫白色にぼかされている. 縁毛は翅の地色と同じ褐色だが, この部分ではやはりうすい紫白色をおびる. 後翅はほぼ一様に灰褐色を呈するが中央に不明瞭な暗色の横線が走っており, これと平行して外縁部も巾ひろく暗色をおびている. 縁毛はうすい黄白色. 開張: 53-58 mm.

♂ 交尾器 (Fig. 16): Valva 腹縁部の骨化は強くなく, その先端部は細く指状を呈するが, valva の先端を超えて突出することはない. Harpe はやや非対称. Aedoeagus の大きさは中庸で先端部に数本の小さい歯をもつ. Cornutus は3群の多数の細かい針から成る.

幼生期: 松田 (1911) がオオエグリバの幼虫として報告しているものは, その成虫の図や記述からむしろ *hokkaida* ではないかと推定される*. 従つて本種の幼生期と食草については正確には未知である.

分布: 日本, 朝鮮, 中国.

この蛾は日本ではもつともよく知られる大型の *Calpe* であるが, 我国の文献では例外なしに "*Oraesia lata* Butler" の名が用いられて来た. これは明らかに松村 (1910, 1931) の影響であるが, 私が最近調査したところでは, 松村が図示した標本は後に述べるように実は次種であつたから, 厳密にはオオエグリバという和名は次種に対して名づけられたと見るべきである. しかしすでに河田 (1932) が本種をオオエグリバとして図示して以来, 平山 (1933), 河田 (1950), 緒方 (1958), 杉 (1959) も同じ取扱いをしているので, 混乱を避けるためこの和名を本種にのこし, 次種に対して別名を与えるのが妥当である. この蛾が正式に記載されたのはごく最近のことで (Draudt, 1950), のちに Berio (1956) が再記載し, ♂

* このことについては服部伊楚子氏の教示に負うところが多い.

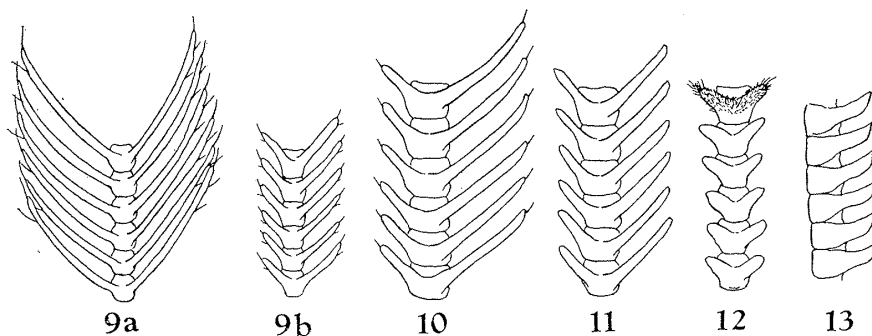
交尾器を図示し、分布に日本を加えた。国内の産地については、従来の記録は次種を含んでいると考えられるので再検の要があるが、本州、四国、九州には確実に分布し、北海道には分布していないか、あるいは南部地方に限って産するものと推定される。私の確認もしくは確実にと推定する産地は次のとおりである。

本州：秋田県（服部伊楚子氏教示）；福島県磐梯山，1 ♀，4. VIII. 1927（北大所蔵標本）；長野県上田市，多数（農技研所蔵標本）；長野県松本市外朝日村，1 ♂，VIII（清沢晴親採集）；東京都高尾山，3 ♀ ♀，VIII-IX（杉採集）；静岡県函南，1 ♀，VIII（西川協一採集）；静岡県大滝温泉，2 ♀ ♀，VII（杉採集）；新潟県弥彦山，2 ♂ ♂ 3 ♀ ♀，VII，IX（佐藤力夫採集）；新潟市，1 ♀，X（桜井精採集）；新潟県逆巻，1 ♀，VII（佐藤力夫採集）；兵庫県氷上郡神楽，1 ♂，VIII（山本義丸採集）。

四国：徳島県東祖谷，1 ♀，25. VII. 1955（山本義丸採集）。

九州：大分県佐伯市，1 ♂（中村正直採集）。

朝鮮：1 ♂（北大所蔵標本）。



Figs. 9-13. 日本産 *Calpe* の触角（13のみは側面から，他は下面から見たところ）。9 a. *thalictri* ♂，9 b. *thalictri* ♀，10. *gruesa* ♂，11. *lata* ♂，12. *hokkaida* ♂，13. *minuticornis* ♂。

Calpe lata Butler (= *aureola* Graeser)

キンイロエグリバ (Figs. 5, 6)

Calpe lata Butler, 1881: Trans. ent. Soc. Lond., 1881: 21.

Calpe aureola Graeser, 1889: Berl. ent. Zeit., 33: 260; Warren, 1913: 383, pl. 69 h; Bryk, 1948: Arkiv f. Zool., 41 A (1): 135; Berio, 1956: 113; 井上・杉, 1958: 579; 杉, 1960: 28 (キンイロエグリバ)。

Oraesia lata 松村, 1910: 13, pl. 18, f. 10 (オホエグリバ); 松村, 1931: 824, f. 962 (オホエグリバ); 松村, 1932: 567, pl. 23, f. 7 (オホエグリバ); 加藤, 1934: pl. 25, f. 2 (オホエグリバ)。

Calpe lata 斎藤, 1960 b: 49 (キンイロエグリバ)。

成虫：下唇鬚側面は黄褐色でややオレンジ色をおびる。頭部は灰褐色，胸背もほぼ同色だ

がやや黄色味をおびる。腹背は灰褐色。前翅は前種よりもやや短く巾ひろく、特に前翅外縁は翅頂の下で内方に彎入し、のち強く外方にふくらみ、外縁及び縁毛端部は波状を呈している。前翅地色は濃い黄褐色で、一見金色をおびてさえ見える。翅頂に発する斜条はほぼ直線状だが、前種よりは第1, 2脈の間でやや内方に曲つており、濃い赤褐色、その外方はうすい紫色にぼかされ、後縁のえぐれのほぼ中央におわる。斜条の内方にある横線は黄褐色ないし赤褐色で、やはり外方をうすい紫色でぼかされる。中室端には上角及び下角にそれぞれ明瞭な黒色の小点をもつのが普通である。翅の外方では翅脈はうすく黒色にそめられる。翅頂付近は同様にうすく黒色をおび、ここから斜条に沿つて発する暗色の垂外縁線はのちに分れてほぼ外縁と平行して走り、第2-7脈上に小黑点をのこす。第3脈上に *gruesa* のような淡色斑をもたないが、この部分から外縁にかけてやはりいくぶんうすく紫白色をおびる。縁毛は黄褐色、第2-5脈の部分では紫灰色。後翅は *gruesa* と異つて地色は黄色をおび、中央にふとい灰黒色の横線をもち、外縁部も巾ひろく灰黒色を呈している。外縁及び縁毛は *gruesa* と異なりあざやかな黄色を呈する。開張：49-54 mm.

♂交尾器 (Fig. 18) : Valva は *gruesa* よりもやや巾せまく、腹縁は先端部でややふとい指状となり valva の先端をこえている。Harpe はいくぶん左右非対称で右側はふとい棒状、左側はほぼハート形を呈する。Aedoeagus はほぼ中庸の大きさで先端に近く1個のやや長い歯をもち、cornutus は数個の短い針から成っている。

幼生期：本種の幼虫はごく最近斎藤 (1960 a, 1960 b) によつて発見され、その形態について簡単に報告された。幼虫は青森県でコウモリカズラ *Menispermum dauricum* から得られている。

分布：日本、朝鮮、アムール、中国（東北部）。

Lata Butler は古く日本から記載され、Leech (1889) もこれを扱つたが1度も図示されたことがなく、日本ではその種名は前種に対して用いられて来た。一方アムールから記載された *aureola* Graeser は、Warren (1913) によつて日本を分布に加えられたが、日本ではほとんど注意されず、ごく最近まで井上・杉 (1958) が引用したのみであつた。その後私は本種の実物を見る機会を得て分布を確認し、キンイロエグリバと命名、簡単に報告した (杉, 1960)。しかしその後見ることのできた Berio (1956) の研究によると *aureola* と *lata* が同一物であることが明かになり、*lata* は非常に大型の個体 (開張 55 mm) であるという。Berio は種名として *aureola* を用いているが、これはおそらく彼の思いちがいで、より古い名 *lata* が本種の種名として残さるべきである。日本で松村 (1910, 1931, 1932) が *Oraesia lata* の名でオオエグリバとして示した図は明かに大型の *Calpe* の♀を示しており、今までこれは前種 *gruesa* を描いたものと理解されていた。ところが私が北海道大学農学部昆虫学教室の所蔵標本を調べたところ、松村の用いた標本は実はこのキンイロエグリバであつた。また加藤 (1934) が示した図もいわゆるオオエグリバでなくて本種であり、本種が原色で示された唯一の例である。国内では現在まで本州のみから得られており、北海道産の標本は北大にも見当らない。私の確認している産地は次のとおりである。

本州：青森県弘前市，1♂3♀♀，VII（斎藤和夫飼育）；長野県上田市，3♂♂6♀♀，

VIII (農技研所蔵標本); 長野県北安曇郡八坂村, 1 ♂, VIII (倉田稔採集; 杉, 1960); 長野県松本市, 1 ♂, VIII (清沢晴親採集); 新潟県弥彦山, 1 ♀, IX (佐藤力夫採集); 新潟市, 1 ♀, IX (氏家佳代子採集); 新潟市秋葉山, 1 ♂, VIII (桜井精採集); 新潟県逆巻, 3 ♂♂ 3 ♀♀, VII (佐藤力夫採集); 新潟県小木, 城, 1 ♂, VIII (村木弘昌採集); 佐渡島畑野村, 1 ♂, VII (本間採集); “丹波”, 1 ♀ (北大所蔵標本)*; 兵庫県柏原, 1 ♂, VIII (山本義丸採集). 朝鮮: Seoul, 光陵, 1 ♂, VII (朴世旭採集).

***Calpe hokkaida* Wileman (=hönei Berio)**

キタエグリバ (Fig. 7)

Calpe hokkaida Wileman, 1922: Entom., 55: 198; 井上・杉, 1958: 578 (キタエグリバ).

Calpe hönei Berio, 1956: 116. *Syn. nov.*

Oraesia (Calpe) striata 松村, 1930: 25, pl. 6, f. 11 (スデエグリバ).

成虫: 下唇鬚側面は灰色でオリーブ色をおび, 毛塊はいくぶんオレンジ色をおびる. 頭部, 胸背はうすい灰褐色, 前翅は *thalictri* にもつとも似るがやや巾ひろく, 後縁のえぐれはやや浅く, 後縁基部の葉状部の突出は弱く縁毛もやや短い. 前翅地色はうすい灰翅色で, やや紫灰色をおびる. 翅頂から発する斜条は細かい屈曲はあるがほぼ直線状で, 後縁のえぐれのほぼ中央におわり, オレンジ色, その外側はかなり巾ひろくうすい紫灰色にぼかされる. この斜条とその内方にある各横線の内側は広く灰緑色ないしオリーブ色をおび, *thalictri* よりも一そう目立つて帯状にみえる翅頂に発する亜外縁線は暗色で, 第3-4脈のあたりでもつとも外方にふくらむ. 本種では翅脈が灰黒色にそめられることはなく, また亜外縁線上に黒点を現わさない. 亜外縁部は第4脈から後縁角にかけてうすい紫灰色をおび, 縁毛に及ぶ. 縁毛は他の部分では褐色をおびる. 後翅はうすい灰褐色で, 基部に向つてやや淡色となるが, 横線や外縁部の暗色帯はほとんどみとめられない. 縁毛はうすい黄色. 開張: 45-50 mm.

♂交尾器 (Fig. 17): Valva の構造は *gruesa* や *lata* とよく似ているが, 腹縁の骨化した部分は先端で指状の突起となつて内方へ強く曲り, valva を横断してその背縁からさらに突出している. Harpe は左右非対称, 右方のそれはかなり長い腕状. Aedoeagus はすこぶる大きく, 先端部背面と中央部腹面には粗い歯を生じて鑷状を呈し, さらに背面には強い1突起をそなえる. Cornutus は数個の不齊な骨片で, 歯を担っている.

幼生期: 本種の幼虫はすでに Wileman (1922) が飼育しており, 食草キケマン *Corydalis pallida* が報告されている. また服部伊楚子氏の教示によると河田 (1951) がウスエグリバとし, 野村・服部・河田 (1958) 及び河田 (1959) がオオエグリバとして示した幼虫の写真及び記事はすべて本種である. この幼虫はカラマツソウの類 *Thalictrum* で採集された. また松田 (1911) の報告した幼虫がもし本種であるならムラサキケマン *Corydalis incisa* も本種の食草となるが, 再確認を要する.

分布: 日本, 中国.

* 松村 (1910, 1931, 1932) の図に用いられた標本.

この蛾が注目されだしたのは比較的近年のことで、まず Wileman (1922) が British Museum の標本によつて本種を分離し、函館で飼育した標本を type として記載、中国にも産することを明かにした。その後本種は Seitz の図説でも見落され、井上・杉 (1958) がキタエグリバと命名引用した以外に注意されることがなかつた。しかし松村 (1930) が *striata* Poujade として原色で示した蛾は *hokkaida* であつて、これが本種の唯一の図示例である。松村の用いた学名はもちろん誤りで、井上・杉 (1958) の目録からも除かなければならない。実物については私は北海道大学農学部昆虫学教室の標本を確認することができた。和名スジエグリバは従つてキタエグリバの異名となる。最近 Berio (1956) は同じく中国及び日本の材料によつて本種を扱い、♂交尾器を図示しているが、彼も Wileman (1922) の記載を見おとし、新にこれを *Calpe hōnei* Berio と命名している。これはもちろん無用な名である。国内では北海道及び本州から見出されている。私の確認している産地は次のとおりである。

北海道：釧路国標茶，1 ♀，28. VIII. 1957 (飯島一雄採集)；十勝然別，1 ♀，20. VII. 1951 (服部伊楚子飼育，農技研所蔵標本)；札幌及び定山溪，多数，(北大所蔵標本)；函館 (Wileman, 1922)。

本州：山形市，1 ♀，15. X. 1960 (木俣繁採集)；群馬県川古温泉，1 ♂，6-7. IX. 1959 (小林洋採集)；群馬県熊ノ平，1 ♀，6. IX. 1952 (杉採集)；群馬県戸倉，1 ♂，22. VII. 1954 (土生昶申採集，農技研所蔵標本)；長野県上田市，1 ♀，20. VIII. 1957 (服部伊楚子採集，農技研所蔵標本)；長野県大野川，1 ♀，31. VIII. 1931 (清沢晴親採集)；東京都高尾山，1 ♀，3. VII. 1932；1 ♂，17. X. 1933 (東京農大所蔵標本)；新潟県弥彦山，5 ♂♂，18, 29. VII. 1958；1 ♀，26. VI. 1960 (佐藤力夫・桜井精採集)；新津市秋葉山，1 ♂，4. VII. 1959；1 ♀，24. VI. 1960 (村木弘昌・佐藤力夫採集)；新潟県逆巻，1 ♂，2. VII. 1956 (馬場金太郎採集)。

Calpe minuticornis Guenée

ミナミエグリバ (新称) (Fig. 8)

Calpe minuticornis Guenée, 1852: Spec. Gen. Lep., 6: 374; Moore, 1882: Lep. Ceyl., 3: 78, pl. 153, f. 3; Warren, 1913: 383, pl. 69 g; Wileman, 1922: 198; Berio, 1956: 113.

成虫：下唇鬚側面，頭部及び胸背はうすい灰褐色，頭部下面，前脚基節等はまつたくオレンジ色をおびない。前翅は灰褐色ないし紫灰色，外見はやや *thalictri* に似ているが，翅頂から発する斜条は第3脉付近でわずかに内方に彎入するていどで後縁のえぐれの中央部よりも基部に近くおわる。斜条は黄褐色ないし赤褐色，前翅地色は斜条の外方で淡色を呈することはなく，内方の各横線も弱く不明瞭で，前翅の色彩はやや単調である。中室端部はやや暗色をおびるが，上角及び下角に存在する黒点はきわめて微少でみとめにくいこともある。翅の外半で翅脉はかすかに灰黒色をおびる。亜外縁線の走り方は *hokkaida* にほぼ似るが弱く，翅脉上に弱い暗色点をのこす。第3脉上ではこの暗色点に接しその内側に小さい灰色斑があるが微弱で，その外方外縁にかけてはわずかに灰白色をおびるていどである。縁毛は灰褐色で，端部は黄褐色をおびる。後翅は暗灰褐色，内方に向つてやや灰黄色を呈するが横線



Figs. 14-18. 日本産 *Calpe* の ♂ 交尾器. 14. *thalictri*, 15. *minuticornis*, 16. *gruesa*, 17. *hokkaida*, 18. *lata*.

はまったくみとめられない。縁毛はくすんだ灰黄色。開張：39-43 mm.

♂ 交尾器 (Fig. 15) : Valva 腹縁の骨化は先端部に近く腕状の突起となつて valva の外縁を超える。Harpe は小さく、左右対称。Aedoeagus は背面に細かい鑷状部をもつのみで、cornutus を欠く。

幼生期：インドでは Moore (1882) の記録があり、Wileman (1922) によつて引用されている。また Gardner (1948) も幼虫を記載しており、インドでの食草はツヅラフジ科の *Cocculus macrocarpus* 及び *Cissampelos pareira* となつている。

分布：日本、琉球、台湾、フィリッピン、ジャワ、インド、セイロン、オーストラリア。

この蛾の分布は他の 4 種とちがつて東南アジアにひろく分布しており、日本ではただ 1 度 Wileman (1922) の記録があるだけである。彼は British Museum に Oiwake (長野県追分) でとれた 1 ♂ のあることを記しているが、これは井上・杉 (1958) も見落している。Berio (1956) の記録している 1 ♂ は Wileman の扱つた材料と同じものと考えられる。私がこれまでに見た日本産の標本はすべて屋久島以南のもので、本種はたとえ本土に土着しているとしてもその分布は西南部に限られており、Wileman の材料は例外的に中部でとれたものと推定される。また屋久島と奄美大島からのウスエグリバの記録はたぶん本種の同定のあやまりであろう。私の直接見た標本は次のとおりである。

屋久島：安房，1 ♀，10. VIII. 1956 (石塚一義採集)。

奄美大島：住用村，2 ♂♂，28. VI. 1924, No. 7830 A, B (河田博士標本，農技研所蔵)。

沖縄本島：首里，1 ♂，16. VI. 1960 ; 1 ♀，9. VI. 1960 (東平地清二採集)。

産地不明：1 ♀，No. 2200 (河田博士標本，農技研所蔵)。

以上の 5 種が日本から確実に知られているが、なお 1, 2 の未解決の種があるので付記しておく。

Calpe albivirgata Hampson. Hampson (1926) がこの蛾を記載したとき、その材料中に日本産の 1 ♂ が加えられていたため、この名は井上・杉 (1958) によつて引用された。Berio (1956) は中国産の 1 ♂ を lectotype に指定したが日本産の標本については触れていない。私は Hampson が日本産の *gruesa* を混同していたのかと想像しているが一応ここでは未解決としておきたい。

Calpe eustrigata Hampson. この蛾も Hampson (1926) によつて記載され、Berio (1956) が日本産の 1 ♀ (British Museum 所蔵) を記録しているがその正体は私には不明である。国外の分布はビルマ、インド、セイロンとなつている。

参 考 文 献

- Berio, E. (1956) Appunti su alcune specie del genere *Calpe* Tr. Mem. Soc. ent. Ital., 35: 109-119.
 Draudt, M. (1950) Beiträge zur Kenntnis der Agrotiden Chinas. Mitteil. Münch. ent. Ges., 40: 168.
 Gardner, J. C. M. (1948) On the larvae of the Noctuidae III. Trans. R. ent. Soc. Lond., 98: 75.

- Hampson, G. F. (1926) Descriptions of new genera and species of Lepidoptera Phalaenae of the subfamily Noctuinae, 373, 376.
- 平山修次郎 (1933) 原色千種昆虫図譜, pl. 40.
- 井上 寛・杉 繁郎 (1958) 日本産蝶蛾総目録, 5 : 578-579.
- 加藤正世 (1934) 分類原色日本昆虫図鑑, 12 : pl. 25.
- 河田 党 (1932) 日本昆虫図鑑, 1149.
- (1950) 日本昆虫図鑑, 改訂版, 750.
- (1951) 学生版日本幼虫図鑑, 98.
- (1959) 日本幼虫図鑑, 263-264.
- Leech, J. H. (1889) On the Lepidoptera of Japan and Corea. Part III. Proc. zool. Soc. Lond., 1889 : 529.
- 松田良彦 (1911) オホエグリバ (*Calpe lata* Butl.) に就きて. 昆虫世界, 15 : 317-319, figs.
- 松村松年 (1910) 続日本千虫図解, 2 : 13, 18.
- (1930) 日本通俗昆虫図説, 2 : 25.
- (1931) 日本昆虫大図鑑, 715, 824.
- (1932) 大日本害虫図説, 565-567.
- 野村健一・服部伊楚子・河田 党 (1958) 果樹吸収蛾類の分布並びに応用分類学的研究(I). 千葉大学園芸学部応用昆虫学教室臨時報告, 3 : 1-26, 2 pls.
- (1959) 果樹吸収蛾類の分類, 分布, 被害に関する調査研究. 千葉大学園芸学部応用昆虫学教室臨時報告, 4 : 1-25, 2 pls.
- 緒方正美 (1958) 原色日本蛾類図鑑, 下 : 171-172, pl. 112.
- 斎藤和夫 (1960a) 蛾類の食草の記録 (I). 蛾類通信, 20 : 18-19.
- (1960b) キンイロエグリバの採集と飼育. 蝶と蛾, 11 : 49.
- 杉 繁郎 (1959) 原色昆虫大図鑑, 1 : 148, pl. 101.
- (1960) 八坂村のヤガ若干の記録. ニュー・エントモロジスト, 9 : 24-28.
- Warren, W. (1913) in Seitz, Grossschmetterlinge der Erde, 3 : 382-384.
- Wileman, A. E. (1922) A new species of genus *Calpe* from Japan. Entom., 55 : 197-199.

Summary

This paper was presented to establish a correct classification of the species of the genus *Calpe* Treit., which are standing in some confusion in most of our literature. It seems necessary to facilitate the identification of these pests of economical importance, injuring various kind of riped fruits in many orchards of Japan. A useful paper by Berio (1956) revising the Oriental species of this genus is followed here, but some minor changes in synonymy are proposed: *Calpe hokkaida* Wileman (1922), which he overlooked, must suppress his new species *Calpe hönei* Berio (1956) described from nearly the same localities, and *Calpe lata* Butler (1881) is a valid name having the precedence of *Calpe aureola* Graeser (1889) he used, when both are conspecific. Five species now secured to inhabit Japan, *thalictri* Bkh., *gruesa* Drdt., *lata* Btl., *hokkaida* Wilem. and *minuticornis* Gn. are discussed and illustrated.